

# ドイツ人留学生の三重大学における留學生活について — 留學途中と留學終了時のインタビューから —

松 岡 知津子

## German Foreign Student Life at Mie University — from Interviews During and After the Study Period

MATSUOKA Chizuko

### 〈Abstract〉

Based on interviews conducted between October 2016 and September 2017 with three German short term foreign students, at the beginning, in the middle and at the end of their study term, this study aims to find their opinions about learning abroad, the classes, as well as the learning system and environment. In particular, this report looks at the interviews conducted after the first semester final examination and after the end of the second semester, with regard to the German foreign student's perception of the experience of learning abroad, in comparison with the interviews conducted at the beginning of the study period. We found that, although at the mid-term interview there was some feeling of frustration and unfulfillment, the students had established their goals, and that, by the end-term interview, they had reached their goals to a certain extent. Moreover, there were suggestions that our tutoring system may have room for improvement.

キーワード：ドイツ人留学生、留學途中、留學終了時、チューター制度

### 1. はじめに

本学には、ドイツからの短期留学生が多数在籍しており、今後もドイツの協定校とのさらなる交流が期待されている（松岡・服部 2017）。本研究では、平成 28 年 10 月から平成 29 年 9 月まで本学に在籍していたドイツ人短期留学生 3 名を対象に、それぞれ留學開始時、留學途中（半期終了後）、留學終了時にインタビュー調査を実施した。留學開始時のインタビューでは、留学生たちの本学への留學動機と留學生活における目標、本学への期待などを話してもらった。このインタビュー結果については、松岡・服部（2017）を参照されたい。

本稿では、留學途中である平成 29 年 2 月の期末試験終了後と留學終了時の同 9 月のインタビュー結果をまとめ、3 名のドイツ人短期留学生が一年の留學を通じてどのようなことを感じたのか、本学に対してどのような印象を持ったのか等を明らかにしていく。まず

次節では、留学途中の平成 29 年 2 月時点でのインタビューについてまとめる。3 節では、留学終了時のインタビューについてまとめる。そして、それらをまとめた上で、4 節では、今後本学に求められる課題について述べていく。

インタビュー調査に協力してくれた 3 名のドイツ人留学生の出身大学および本学における所属等を表 1 に、インタビューの実施時期については表 2 に記す。

表 1 調査協力者の所属と日本語レベル

	出身大学	本学での所属 および交換留学の種類	日本語レベル
A	ライプツヒ大学	人文社会学研究科 特別研究生	上級
B	ハイデルベルク大学	国際交流センター 日本語・日本文化研修生	中級 2
C	ハイデルベルク大学	人文学部 特別聴講生	中級 2

表 2 インタビューの実施時期

	インタビュー時期	調査時期
1 回目	平成 28 年 10 月	留学開始時
2 回目	平成 29 年 2 月	一学期終了後
3 回目	平成 29 年 9 月	留学終了時

上述した通り、1 回目のインタビューについては松岡・服部（2017）においてすでに考察していることから、本研究では、2 回目および 3 回目のインタビュー内容に焦点を当てて考察していくこととする。

なお、本研究では、すべてのインタビューにおいて、インタビューの段階で回答によってさらに詳しくたずねていくという半構造化インタビューの手法を用いた。次節以降では、それぞれのインタビュー結果について見ていく。

## 2. 留学途中時インタビュー

平成 28 年度後期、つまり学生たちにとっては来日後最初の学期が終了した、留学の中間地点とも言える平成 29 年 2 月中旬に、それぞれ個別にインタビューを行い、これまでの留学生生活を振り返ってもらった。あらかじめ準備しておいた質問項目は、以下の通りである。

表 3 留學途中時インタビューの質問項目

1	一学期を振り返って、どうだったか。留學開始時に設定していた自分の目標は、どの程度達成されたか。
2	本学における授業（日本語、学部等）および研究はどうだったか。
3	残りの留學生活をどのように過ごしていきたいか。

以下では、まず 2.1. で質問 1 と 2 を、そして 2.2. において質問 3 について考察していく。

### 2. 1. 一学期の全体的な振り返り

平成 29 年 2 月中旬に行った 2 回目のインタビューでは、まず、留學開始時に行った 1 回目のインタビューの内容を簡単に思い出してもらった。そして、自分が最初に設定していた目標などがどの程度達成されたのか、一学期を振り返ってどう感じているかについて述べてもらった。

本国では大学院生であり、本学では特別研究生の身分を持つ Aさんは、他の特別聴講学生（交換留学生）が求められる週 7 コマ以上受講するという義務はない<sup>1</sup>。その代わり、日本の窓口教員の下で最低 10 時間の研究が義務付けられている。本学在学中にドイツの卒業論文を仕上げることを目指していた Aさんは、半年の間に期待していたほどの進歩がみられず、自分自身に対して不満が残っているとのことであった。

また、授業を受講する義務はないものの、国際交流センターと人文学部で合計 3 つの授業を受講していた Aさんは、ある授業における日本人学生の英語力の低さについて指摘した。授業のテーマの基礎となる用語を知らないために、時として授業のレベルが下がってしまったと感じたとのことであった。

生活面においては、津市における生活に全体的に満足がいないとのことであった。近隣県へのアクセスはよいが、平日はどうしても退屈に感じてしまい、以前留學していた別の大学と比較してしまうとのことであった。

日本語日本文化研修生の Bさんは、留學生活を満喫しており、半年があっという間に感じたとのことであった。しかしながら、日本語日本文化研修生として留學終了時まで完成させなければならない研修レポートについては、思うように進んでいないとのことである。また、これまでは、本学に留學すること自体が目標であったため、それが達成された今、目標を見失ってしまい、学習の動機付けが十分でなくなってしまったとのことであった。また、本国と本学における授業の形態や方法などの違いに多少の戸惑いを感じたとの

ことであった。

そのほかの面においては、留学開始時に期待していたほど日本人とのコミュニケーションが取れていないことについて、残念に思っているとのことであった。

人文学部の特別聴講生である C さんに関しては、まず、生活環境への不満が多く見られた。たとえば、母国で安価に入手できるものが日本では高いこと、寮の設備等への不満である。また、本学のルールについても、理解はできるものの、やはり不便に感じてしまうとのことであった。

また、日本人学生との付き合いについては、本当の友だちになることが難しいと述べた。さらに、日本人学生とのコミュニケーションにおいて、身体的特徴に触れられることについての違和感を述べた。また、津市もそれほど小さくなく、なかなか楽しむことができないということであったが、京都、名古屋などへのアクセスの良さについては評価しているとのことであった。

次に、C さんは、学習面において、期待していたほど日本語力が伸びなかったと述べている。しかし、以前に比べて日本語のコミュニケーションができるようになったことを自己評価していた。そのほか、本学が提供する授業の少なさについての不満があった。たとえば、留学生向けの歴史や文化の授業の開設、上級に至らない留学生でも日本人学生とともに学ぶことができる授業の開設を求めている。さらに、本学での成績がドイツの大学に反映されず、単位化されないことから、学習動機につながらないとのことであった。単位化については、現段階において、本学の成績がドイツのそのほかの協定大学においても認められていないのが現状である<sup>2</sup>。この点については、4 節でも触れるが、今後成績の単位化について、ドイツの協定大学とも連携を取っていく必要があると考えられる。

以上から分かるように、3 名とも、留学当初時のインタビューと比べると、一学期終了後のインタビューでは、様々な点において問題や困難点が浮き彫りになり、マイナスの要素が目についてきているようであった。これは、Lysgaard (1955) の「U 型カーブ」や Gullahorn & Gullahorn (1963) による「U 字曲線」、または「W 字曲線」といった異文化適応の段階においてみられる「ショック期」にも似ていると言えるかもしれない<sup>3</sup>。

しかしながら、以下で見ていくとおり、3 名とも現状を冷静に捉えており、次の学期に向けての具体的な目標および計画を持っていることが明らかになった。

## 2.2. 残りの留学生活について

A さんは、まず、本国から持ってきた論文を仕上げたいとのことであった。また、せっかく日本に留学しているのだから、この機会を利用して、旅行をし、見聞を広めたいとい

う。さらには、修士論文のテーマについて、本国の指導教員と密に連絡を取り合いながら、可能な限り資料収集をして、修士論文に取り掛かりたいということであった。また、前回の日本留学では日本語能力試験 N2 に合格したので、今回の留学では、よりレベルの高い N1 に挑戦すべく、日本語学習にも時間を費やしていく予定であると述べた<sup>4</sup>。

Bさんは、前学期に日本人学生と思ったほど知り合うことができなかったため、部活やサークルに挑戦したいとのことであった。また、休み期間中には旅行をしたいと述べた。さらに、Aさん同様、日本語能力試験 N2 合格を目指すという新たな目標を設定することで、次の学期の日本語の授業等に積極的に参加していくつもりだとのことであった。

Cさんも、AさんおよびBさん同様に日本語能力試験 N2 を目指したいとのことであった。また、旅行にも行きたいとのことであった。

このように、3人とも、日本語能力試験の準備や旅行、論文執筆といった具体的な目標が設定されていた。また、日本語能力試験については、どのようにして勉強するつもりなのかという具体的な学習方法についても質問したところ、「国際交流センターの授業にこれまで以上に熱心に参加する」「日本で買った能力試験対策の本で勉強する」といった具体的な方法について述べることができた。

### 3. 留学終了時インタビュー

本節では、平成 29 年 9 月下旬、3 名の留学生にとってのすべての授業と試験等が終了した後に留学終了時に実施したインタビューについて述べる。それぞれの学生の帰国時期や筆者の用務の都合により、Aさんとはインターネット電話サービスを用いて、Bさんとは本学キャンパス内において、Cさんとはハイデルベルク大学キャンパス内でインタビューを行った。

留学終了時インタビューでは、あらかじめ以下のような項目を準備したが、適宜質問を追加するなどした。

表 4 留学終了時インタビューの質問項目

1	一年間を振り返って、どうだったか。留学開始時に設定していた自分の目標は、どの程度達成されたか。
2	本学における授業（日本語、学部等）および研究はどうだったか。
3	日本や本学への留学を考えている後輩にアドバイスしたいことは何か。

質問 1 と 2 については、留学途中時に質問した内容とほぼ同じである。本節でも、質問 1 および 2 をあわせて 3.1. で、質問 3 については 3.2. で考察していく。

### 3. 1. 一年の留學生活の振り返り

A さんは、一年の留學生活を振り返ると、良いことも悪いこともあったと述べている。たとえば、留學して良かったこととして挙げられたのは、修士論文の資料を集めることができたこと、ドイツの大学での授業のレポートが比較的よくできたこと、アルバイトで行ったドイツ語講師でよい人と出会えたことなどである。これらのことについて、A さんは、本学への留學そのものとは直接関係がないことも多いと考えているという。本学に直接関係ある点といえば、本学の施設に関することであった。つまり、図書館や自習スペースが充実していたことが、修士論文を執筆しなければならない A さんにとっては、よかったとのことである。平日の多くの時間を論文執筆に費やす A さんにとって、学習スペースが各所にあることで、時に気分転換をしながら、学内のさまざまなところで論文執筆ができたことは非常によかったと評価していた。

一方、残念だった点については、本学での留學に直接関係するコメントが多かった。たとえば、以前留學した大学では友人と呼べる人との出会いがあったものの、今回の留學ではそのような出会いに恵まれず、残念だったと述べている。その一つの原因として考えられるのがチューター制度ではないかと A さんは指摘する。その大学では、留學生が来日して入寮するその日からチューターがお世話をしてくれるとのことであった。もっとも助けを必要とする来日直後に支援が受けられないのは、いくら日本語が堪能な留學生であっても心細いであろう。この点においては、4. 1. でさらに検討していきたい。

そのほかの原因として、以前の留學先では部活に所属していたことも考えられるとのことであった。今回の本学への留學においても入部することについて検討してはみたものの、過去の留學経験において一度部活に所属した経験を持つため、今回は論文に集中したとのことであった。同年代の友人に出会えなかったことについて、大変残念だと思っているとのことである。

B さんは、留學を通して、自分について改めて知ることができた点がもっとも良かったと述べている。日本に留學する前には、想像したこともなかったようなこと、例えば B さんにとって友人の存在がいかに大きいかといったことを、今回の留學を通して知ることが出来たことが大変良かったとのことであった。

そのほか、日本が好きであるにもかかわらず、日本人とのつながりがむずかしいことを痛感したとのことである。留學を通して日本語能力は進歩したにもかかわらず、それが日本人との交流には直接生かされなかったという。その理由については、言葉ができて、日本人学生たちが何を考えているのか、よく理解できなかったのだという。一方で、同じ欧州から来た留學生同士では言語の面のみならず、思考も容易に想像できるため、交流が



しやすかったのだという。ただ、これはBさんの個人的な問題であり、Bさんの性格が関係しているだろうとBさん自ら分析している。しかし、同様のコメントはよく耳にすることから、この点についても4.2.で検討したい。

留学途中のインタビューと留学終了時のインタビューにおいて、最も大きな差が感じられたのがCさんである。Cさんは、留学途中のインタビューにおいては、物理的な環境のみならず、自身の学習成果や人間関係においても「日本語が上達しない」「日本人とは友だちになりにくい」などと述べていたが、留学終了時のインタビューでは、肯定的なコメントが目立った。

まず、Cさんが挙げたのが人文学部で実施したインターンシップへの参加経験である。2週間という大変短い時間ではあったものの、ドイツではなかなか体験できない貴重な体験をすることが出来たと述べた。また、一学期終了後の2回目のインタビュー時に「日本人と友だちになりにくい」と話していた点についても、その後よさこいクラブに入り、日本人学生たちと共に練習をし、ともに食事をとっていくなかで、とてもよい友情が生まれたのだという。後期は、そのクラブの中から自分でチューターを見つけたということである。また、寄宿舍での生活も大変良かったのだという。日本人と2人のフラットメイトと4人で住んでいたCさんは、宿舎でも友情が芽生え、大変よい時間を過ごすことが出来たとのことである。

一方で、一部の日本人に対する不快感も示した。それは、Cさんら欧米人のみと交流しようとする人がおり、何度断っても自宅に誘ってくるとのことであった。Cさんらの個性を尊重するのではなく、ドイツからの留学生という属性のみに着目して誘ってくるため、気分を害したという。最終的に、断ることが出来なくなって自宅を訪問したが、大変残念だったと述べている。

また、専門の授業についてもドイツの専門の授業とのレベル差を感じたとのことであった。ドイツでは、もう少し専門的な知識について学ぶのであるが、本学の授業では、少し専門性に欠けている部分があると感じたのだという。これは、Aさんも同様のことを指摘している。Aさんが参加した英語で行われたある授業において、日本人学生がその授業のテーマに直接かわるような基本的な用語を知らなかったために、授業の進行が妨げられたことがあったとのことだった。このように、留学生たちは、母国の授業とのレベル差についても感じているとのことであった。

以上のように、それぞれの学生が、各自の留学生生活を様々な点から振り返った。それぞれが留学を通して感じたこと、得られたものは異なるが、各自がそれぞれの留学を客観的に振り返り、評価していることが分かった。

### 3.2. 後輩へのアドバイス

最後に、将来後輩たちに本学または日本への留学を相談されたらどのように答えるかという質問をした。これにより、再度留学生生活を客観的に振り返ってもらおうと考えたからである。以下では、3 名がとも自分自身の経験に基づいて述べたアドバイスについてみていく。

A さんは、自分が今回の留学でうまく出来なかったことを教訓として、後輩には、できれば少し積極的に日本人にアプローチすることをアドバイスしたいと話した。その他には、自身の経験からアルバイトを勧めたいと話した。また、留学生活には良いことばかりが起こるわけではないということも伝えたいとのことであった。例えば、クラブ活動については、A さんの周囲の留学生の中に、C さんのようにうまく適応できた人とそうではない人が両方いるため、どちらの情報も伝えた上で、とにかく自分で体験してみなければ分からないということを伝えたいとのことであった。本学の魅力としては、物価がそれほど高くないため、生活しやすい点を挙げたいという。

B さんは、後輩に是非留学を勧めたいという。本学には国際交流サークルや留学生支援サークルがあるので、参加すると良いと伝えたいとのことであった。また、同じ趣味や関心を持っていると親しくなるきっかけが作りやすいので、ぜひサークルやクラブを勧めたいとのことであった。

また、日本語学習については、自分より少し下のレベルの授業を受講することをぜひ勧めたいとのことであった。本学国際交流センターでは J-CAT による日本語レベル判定テストにより、日本語クラスのレベルが決定される。その後、レベルに応じて受講できる授業を選択していくわけであるが、その際、自分のレベルよりも一つ下のレベルのコースの授業は受講できることとなっている。B さんは、最初の学期は復習のために下のレベルの授業を受講していたが、次の学期には受講しなかったという。しかし、一年たって振り返ってみると、下のレベルの授業からも学ぶものが多かったため、受講しておくべきだったとのことである。そのため、後輩にはぜひ復習も勧めたいとのことであった。そのほかには、できるだけ留学の機会を利用して旅行をし、「自分の町」を見つけて欲しいとのことであった。もっとも大切なことは、自分の留学生活を楽しむことだと述べている。

C さんは、自身の体験から、クラブかサークルに入することをぜひ勧めたいという。日本人学生と一緒に何かをするということをぜひ勧めたいとのことであった。また、インターンもぜひ勧めたいと述べた。C さんも、はじめは自信がなく、躊躇したもの、最終的にはすばらしい経験になったため、後輩たちには少し難しいと感じることで積極的に体験してみてほしいと述べた。



#### 4. 本学に求められること

これまでの3名のドイツ人留学生へのインタビュー結果から、彼らが本学にどのようなことを期待し、どのようなことを考えながら留学生活を送ってきたのかが見えてきた。

そして、3名のドイツ人留学生へのインタビューを通して、本学に求められることのいくつかも明らかになったと考える。本節では、まず4.1.において、チューター制度の改善の提案を、次に4.2.において日本人との交流という観点から、本学国際交流センターで開講している「留学生と学ぶ日本」という授業について、最後に4.3.において本学とドイツの協定大学の単位化の可能性について考えていく。

##### 4.1. チューター制度について

大塚（2016）は、高知大学では、日々の個人チューターのほかに、来日時にもチューターがおり、最初の段階でのサポートを担当していると述べた。本学には現在そのような制度がなく、国際交流チームで一括してサポートを行っている。そのため、個別の疑問や不安な点等については、すべて国際交流チームで請け負うことになっている。しかし、もしこれをチューターが行うことが出来れば、本学の学生にとっても留学生のサポートを通して留学生への理解が深まるであろう。また、留学生にとっては、最初のもっとも不安な時期をサポートしてもらうことにより、よりお互いの理解が深まるのではないかと考える。今後、他大学の事例をさらに参照しながら、来日直後の支援についてさらに検討していきたい。

##### 4.2. 日本人学生との交流について

筆者は、平成28年度後期から全学対象の「留学生と学ぶ日本」という授業を担当している。同授業では、日本人学生（主に1年生）と留学生があるテーマについてディスカッションを行うというものであるが、平成28年度の講義終了後のアンケートから大変興味深い結果が得られた。それは、多くの日本人学生が「留学生について知ることができてよかった」「分かり合うことができた」と評価しているのに対し、一部の留学生からのコメントに、「期待していたほど日本人学生のことを理解することが出来なかった」「授業の人たちとカラオケに行く機会はあったが、一度だけで、結局表面的な付き合いだと思った」というコメントがあったことである。大半の留学生からは「日本人学生と親しくなることができた」「日本についてさらに知ることが出来た」などといった肯定的なコメントが得られたものの、一部の留学生と日本人学生の認識に差があることも明らかになった。

そこで、今年度の授業では、ディスカッションすることだけに焦点を当てるのではなく、

まずは留学生と日本人学生が十分に話しやすい雰囲気を作るところから始めることとした。この授業の新たな試みとその結果については、また改めて分析したいと思う。

#### 4.3. 単位の連携について

C さんも述べていたように、本学の授業がドイツの大学で単位化されないことが学習動機のさまたげにもなるとのことであった。留学で得られることは多くても、せっかく学んだ内容が形として残らないのは残念である。

筆者は、平成 28 年および 29 年の 4 月から 9 月まで、ドイツの協定大学であるハイデルベルク大学東アジア研究センター日本学研究所の客員講師として日本語教育に携わった。その際、日々の日本語教育や学生への対応といったルーチン業務に加え、ハイデルベルク大学東アジアセンター日本学研究所の会議等に参加したり、管理運営についての話を耳にしたりする機会を得た。そこでは、ドイツの他大学ですでに一部行われているという協定大学の授業の単位化についての必要性も議論されていた。海外の授業を母国で単位化するにあたりもっとも大きな問題のひとつとなるのが、授業のカリキュラムはもちろん、授業レベルの質の保証であると言えよう。欧州では、エラスムス計画（ERASMUS、European Region Action Scheme for the Mobility of University Students）によって盛んに学生の交流が行われている。本学でも、授業をコード化するなどすることで、協定大学との授業の単位化を検討していくべきではないだろうか。

#### 5. 今後の課題

本稿では、3 名のドイツ人留学生について、留学開始時と留学途中、そして留学終了時の 3 回、それぞれ半構造化インタビューによる聞き取り調査を行うことで、留学生たちが留学にどのようなことを期待し、実際にどのようなことを体験したのかを概観した。今後は、留学を終えて帰国した後、改めて本学への留学生生活を振り返ってもらい、どのように評価しているのか、また、留学がどのように彼らの生活に生きているのか等を追跡調査してみたい。

また、本稿では、本学の交換留学生の中で最も多いドイツ人留学生に焦点をあててみたが、その他の国の学生はまた事情が異なっているはずである。そこで、今後はその他の国の学生についても同様の調査を行って行きたいと考えている。

#### 脚注

注 1 留学の身分によって異なるが、例えば、特別聴講生の場合なら、週に 7 コマ以上の授業を聴

講することが義務付けられている。研究生であれば、週に10時間以上指導教員の元で研究することが義務付けられている。

注2 本学で受講した授業の成績や評価は、現段階においてドイツの協定大学では単位として認められていない。しかし、中国や韓国、タイなどの協定大学では、本学で取得した成績の一部が単位として認められることも多い。

注3 異文化の適応過程には5つの段階があるとされている。最初の段階は「ハネムーン期」とも呼ばれ、環境の全てが新しく、楽観的に異文化に接することが出来る段階である。その後、時間の経過とともに第2段階の「ショック期」に入ってくる。この段階では、新しい文化に対して敵対心を持ったり、異文化をステレオタイプの的に捉えたりする傾向がある。自分と同じ文化から来た人とのコミュニケーションが増える傾向がある。その次の段階に「回復期」がある。回復期では、周囲の環境に慣れ、次第に文化変容が見られる。最後の段階として「安定期」がある。安定期では、異文化適応がほぼ完成すると考えられる。新しい習慣が受け入れられるようになり、ストレスや心配などもなくなっていき、新しい習慣を楽しむことが出来る。

注4 日本語能力試験（JLPT）とは、国際交流基金と日本国際教育支援協会が主催する日本語テストであり、世界的に実施されている。レベルはN5からN1まであり、N1が最も難易度が高い。N1では幅広い場面で使われる日本語を理解することができるレベル、N2では日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができるレベルである。同試験は、就職や大学および大学院の進学時にも日本語レベルを証明するものとして利用されるだけでなく、日本国内および海外の教育機関において日本語クラスのレベル分け等に使用されることがある。例えば、本学国際交流センターの場合、日本語授業を受講するために日本語レベル判定テストを受験する必要があるが、N1保持者は合格証を提示することで試験が免除され、自動的に上級クラスに入ることが出来る。ドイツハイデルベルク大学においても、N2に合格していれば、5学期の授業に合格したものと認められることになっている。このようなことから、同試験のある一定のレベルに合格することそのものが、日本語学習者にとっての大きな目標の一つになっている。

注5 J-CAT（Japanese Computerized Adaptive Test）とは、筑波大学が開発したコンピューターテストのことである。聴解、語彙、文法、読解の4つのセクションから成り、出題される問題と問題数は、受験者の解答の正誤によって変化する。受験時間も受験者によって変わり、45～90分程度かかる。本学国際交流センターでは、日本語授業のクラス分けのために、前期開始時と後期開始時にそれぞれ1回ずつ、このテストを実施している。なお、本学では、定められた授業に合格すれば、連続した次の学期に自動的に一つ上のクラスに入ることが出来るという進級システムを用いている。

## 参考文献

上田博司・藤本浩子（2013）「チューター制度の現状と課題：大阪大学大学院人間科学研究科・人間学部におけるチューター実績調査より」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』第17号. 31-41.

大塚薫（2010）「高知大学におけるチューター制度の現状及び課題」『高知大学総合教育センター就

学・留学支援部門紀要』第 4 号. 121-138.

大塚薫 (2016) 「外国人留学生に対する支援体制の構築—チューター制度に関するアンケート調査結果からの検証—」『高知大学留学生教育』第 10 号. 45-61.

松岡知津子・服部明子 (2017) 「ドイツ人留学生の三重大学への留学動機」『三重大学高等教育研究』第 23 号. 89-98.

Gullahorn, J. T., & Gullahorn, J. E. (1963). An extension of the U-curve hypothesis. *Journal of Social Issues*, 19 (3), 33-47.

Lysgaard, S. (1955). Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 7, 45-51.

Ting-Toomey, S. (1999). *Communicating across cultures*. New York: The Guilford Press.